大地

第　41　号
2012.9.15.発行
浄　國　寺
上越市寺町3丁目14-10
☎025-523-5724

生（なま）の魅力

山崎隆昌

暑い夏だった。今年は湿りのないカラ梅雨で、梅雨明けとともに気温は一気に急上昇し三十度をはるかに超える日が続いた。お彼岸に間近い今も、酷暑の日は続いている。人も、動物も、植物もヘロヘロの状態。

暑い暑い今夏、幾つかの音楽会に出かけ、演奏を楽しむことができた。

七月十四日には、オーケストラ・アンサンブル金沢の定期演奏会が、妙高市文化ホールで開かれた。アンサンブル金沢を聴くのは、東京オペラシティでのコンサート以来で二年ぶりになるか。

当日のプログラムは、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲、同じくベートーヴェンの交響曲第五番「運命」と大曲が並べられた。指揮はダニエル・ハーディング。一九七五年、英国生まれの気鋭指揮者。サイトウ・キネン・オーケストラや新日本フィルハーモニーなどの指揮をつとめ日本にもなじみの深い指揮者。（この指揮者のことは、私はあまり良く知らず、右記は人の受け売りである）

オーケストラの演奏会は久しぶりのことで、聴きおわり心地よい興奮が残った。

ヴァイオリンのソロは韓国のシン・ヒョンス。演奏は、女性らしく繊細で、高音の美しさが印象的だった。すごいテクニック。

交響曲第五番は、随分以前に外山雄三のN響で聴いて以来。ハーディングの演奏はとても歯切れが良く、紡ぎ出される音がすーっと自分の中に入り込んでくる感じだ。特に弦楽器が気持良く響いていたように思う。

やはり生の演奏は、CDやレコードとは違う。それは音を伝えようとする側と、それを受け止めようとする側の、臨場感というか、緊張感というか、一体感というか、音の響きの中にすっぽり身を置いているという感じがするのだ。

現在はデジタル全盛の時代で、様々な音源が音楽を自由に、ジャンルを問わず提供してくれる。今やレコードを駆逐したCDすらが売れない状況であるという。

生演奏と再生音は質の違うもので比較は出来ない。それでも、汗だくになり、息遣いが聞こえてくる演奏者の姿を目の前にする生の演奏は、音が我が身に直接に響き、器械の再生音とは違うと言いたくなる。これは野暮か。

人の言葉も電話やメールより、生の声は聞く者に直接伝わり響いて来る。

二十年以上も前の夏ことだが「宮本文昭と仲間たち」の演奏が、上越文化会館で行われた。ところが当日の文化会館は空調設備が故障し会場は蒸し風呂のような暑さ、座っているだけで汗びっしょりの状態だった。

演奏を始める冒頭、宮本文昭は「今日は申し訳ないが上着を脱いで演奏させてもらう。暑くて大変だろうがどうか自分たちの演奏を聴いてほしい」という主旨のあいさつをニコニコ笑いながらされた。演奏は文字どおり汗だくの熱演で、聴く方も心が熱くなったことを思い出す。

ダニエル・ハーディングは、東日本大震災の当夜、新日本フィルと東京公演を強行したとのこと。このことはNHKテレビ番組「3月11日のマーラー」というタイトルで放映されたという（私は視ていない）。余震で揺れる会場で、ハーディングは演奏を通じて何を伝えたかったのだろう。生演奏の極致か。

かく言う私も、最近は演奏会に出かけることはめったになく、日頃もっぱらCDで音楽を聴き楽しんでいる。もともと出無精の質。爽やかな風が吹く秋は音楽を楽しむ季節だ。でも今年は暑い秋がまだ当分続きそう。

うぬぼれ

北本町3　大橋芳子

「自宅で最後を看取ることについて、心の準備は良いですか？」看護師さんの優しい声が私をどきっとさせた。

義父「九七歳」が、五月下旬脳梗塞で意識不明となった。三週間の入院の後、退院に向けてのサービス調整打ち合わせの時だった。ケアマネジャー・訪問看護師・ヘルパーさんなどの視線が私に向けられた。私はうわずった声で「はい」と答えた。その後、在宅サービスの計画が手際よく話し合われ、安心できた。終了後薄暗い病室に戻ると、義父の呼吸は荒い。思わず「早く家に帰ろうね」と声をかけた。悲喜こもごも暮らしたあの部屋で、最後を送らせてあげたいと私達家族は思っていた。

しかし苦しかった。点滴だけで延命治療を希望しないという判断、本当に本人が望んでいたことか？家族親戚で話し合っての苦汁の決断だが、これで良かったのだろうか？

私は、職業上死への看護も学びさまざまな人と関わりを持たせていただいた。

「死に方は生き方だ」とわかったように言ったこともある。それなのに、今こんなに苦しいのだ。この苦しさを吐き出したくふらふらと病棟の廊下を歩く。CT画像を見ていた若い女医さんに私は声をかけ、吐きだすように話した。

延命治療を希望しないと判断をした家族のつらさ、延命治療について医者まかせにせず、もっと皆で考えてほしい。在宅で看取る不安など、先生は黙って聞き、最後に「おじいちゃんは経管栄養で生かされているのでなく、自分の力で生きている。家に帰れば喜ぶはず。脚をさすってあげて」とおっしゃった。

私は思わず眼がうるんだ。同時に喜びや悲しみを表出しあえる人は私にはどれだけいるだろうか？今まで、人の心の叫びを真摯に聴いてあげていただろうか。と自分に問いかけた。

そして、義父は退院二週間足らずに安らかに息を引き取った。この間多くの人から支えていただいた。近所の人、医師そして介護関係の方など。今まで見えなかった事が見えるようになり、感謝で頭がさがる。

この数年間、つらい体験が続いた。

二年前義母の死、それはあまりにも突然のがんの宣告だった。元気に畑仕事、編み物をやり、近所の人、友人から慕われていた。余命一カ月が四カ月生きぬいた。痛みを抑えるために時間を見ながらの投薬、そして点滴。在宅を希望する義母をみんなで見守った。義母は、痛みに苦しみながら生きたいと満身の力を振り絞っていた。当時、仕事をしていた私は緊張でうつろな時間を過ごしていた。吐血下血を繰り返しながら、義母の最後の言葉は「ご飯食べたか？ありがとう」私は、仏様は信心深いこの人をこんなに苦しませるのか。生と死の狭間は、こんなにも苦しいものかと力を落とした。

叔母は何日も泣いていた。無言でうつむいているその姿を見て、戦前戦中そして終戦と生きぬいた女性の苛酷な人生を深く感じつらかった。

そして、その半年後の昨年春、自分の乳がんが発見。幸いにも早期でひと安心だった。病室で知り合った仲間と、闘病のつらい体験、家族子供らの支え等、ほそぼそと言い合った。今も仲間と交流させていただいている。

このようにして、さまざまな試練がご縁となり、気づかされ頭が下がる。しかし、時の流れとともに再び「うぬぼれ」が頭を持ちあげてしまうのだ。

救はるる縁なき泣く胸の
涙の底にやどるみ仏

【山崎大水自選歌集『願生』から】

山崎大水師は先々代の浄國寺住職様であります。多くの短歌を詠まれ、自選歌集としてまとめておられましたが、現在の住職様のご尽力により、昭和五十八年に自費出版されました。

※大橋さんは元上越市の保健師さん

【俳句】

山崎　睦

夏草の少し刈られて無住寺

訪えば猫が出て来る昼寝時

倒伏の稲にてこずるコンバイン

これよりの風も日差しも秋のもの

白髪に赤きセーター老紳士

（平成五年）

睦（母）が命終して一年半になります。その時以後、寺報「大地」には母の俳句は載らなくなりました。ありがたいことに、幾人かの人から、母の俳句を継続して掲載してほしいとの声が寄せられて来ております。そこで今号より載せることにしました。掲載の俳句は、母が熱心に通い続けた俳句教室の句集から選び採ったものです。

（隆昌）

道具というものは

山崎　慎子

二十年程前のことだったろうか。まだ何でもやってみたかった頃のことである。気になる枝を払いたくて、高枝バサミがほしいと思った。ホームセンターのチラシをたよりに早速出かけてみた。説明によれば、誠によろしく出来ていて、それは理想的なモノに思えた。値段も気に入り、買い求めて早速使ってみた。

初めの頃は成る程、切れ味も良く、伸縮自在、柿の実を落とすことなく採ることができたりと、ほぼ満足の体だった。

やがて月日が経ち、あちこちギクシャクし始め、最初の頃の冴えはなくなっていた。

ちょうどそんな頃、長年冬囲いから境内のあちこちの面倒をみてくれていた「とーちゃん」が訪ねてきてくれた。背も手も足も大きく逞しい男性で、気持ちの優しい人だった。自分の誕生日が母親の命日という。

世間話のついでに、高枝バサミのことを愚痴った。フンフンとお茶うけの漬物を食べながらひとしきりうなずいてくれた後で、とーちゃんはおもむろにこう言われた。

「ねー、道具っていうものは、長ーく使うもんだから、良い物を選んで買わないとね。道具の安物買いはね……」

聞いてる私はうなずくしかなかった。

高いものが良いものでは必ずしもないが、良いものは、おおむね高い。それだけの材料手間・暇がかけられているのだ。

しかし、私はしばしば値段だけに気をとられ失敗してしまう。勿論安いものが全て駄目では決してない。これだけのものを、あんな安く手に入れることができたと大いに満足し、心のかたすみで、作り手や売り手に申し訳なく思うこともあるのだ。

ウチには、私より先に台所にあったものが、今だに現役で活躍している道具がある。プロが使うような鉄製の中華鍋で直径三十三㌢、重さ一・五㌔の品である。

五十年程前、働くようになった義姉たちが、義母へ贈ったプレゼントである。今もバリバリに日々活躍してくれている鍋である。流石近頃は上手くふりまわせなくなってきたけれど、とても重宝している。これからの五十年も難無く使えそうに思える程の丈夫さである。

そして日々、この中華鍋をガス台にかける度、とーちゃんを懐かしみながら、その言葉をかみしめるのである。

「道具というものはネ」

ワン公物語②

―蓮のつぶやき

山崎 蓮（慎子代筆）

私は“れん”前の号から私のつぶやきが載せられた。そこで順序として、私がこの家の一員になるところから話をやり直そうと思う。

なにしろ私も十二才。そろそろ身辺整理を考えないとね。でもワン公はこの身ひとつが全てなのだ。ならばせめて「自分史」を遺そうなんて思い立ったのだ。

私は白根で生まれ、二カ月余りはお母ちゃんや兄弟と暮らしていた。ある夏の日、大きな手が五百グラムにも満たなかった私を抱きあげ篭の中へ。そのまま車で運ばれたのだ。突然、親兄弟から引き離され車というものに乗せられ、小さい私はクラクラしていた。

着いた先には白衣を着た人が優しく迎えてくれたので、とんでもないことになる訳でもなさそうだと少し安心した。（この人は獣医さんだったので、今でもずーっとお世話になっている）

間もなく二人の女の人が嬉しそうに愛しそうに私を抱きあげたのだった。それからまた少し車に乗り、着いた先がつまり私の終の棲家だった。

〃蓮〃と名付けられた私は、家族の視線をあびながらまずトイレのしつけ。ワーワー言いながら、それでも私はそこそこお利口だったのでトイレトレーニングは間もなく終った。

小さかった私は、餌を食べるにも助けを必要とした。いちばん小さい食器なのに傾けて貰わないと口が届かないのだ。

夜になると私は一人が寂しくてお母ちゃんや兄ちゃんを思い出してキュンキュンないた。「誰か来てよー」と訴えても、誰も来てくれなかった。それでもちょうどお盆の頃で家族が増えていたので、昼間はいつも誰かが遊んでくれた。茶の間に放し飼いにされていたので、長椅子に誰かが寝転ぶと側に行き、髪の毛にじゃれるのが大好きだった。

少し大きくなった頃、母さんと私は毎晩のように鬼ごっこをして遊んだものだ。「蓮！かくれん坊しよう」と母さんが部屋から連れ出して廊下に行く。とことこ後をついて行った私はやがて母さんを見失う。どこからか私を呼ぶ声がする。声のする方へ、母さんの匂いのする方へ探しに行く。

この辺なんだけどおかしいなァ。どうして見つからないんだろう。少しだけ不安に思う私の耳に、また母さんの声がする。「れーん ここだよー」声はすぐ近くから聞こえてる。でも、私には分からない。

そこへ突然母さんが現れて「蓮、ここだよ」と言いながら私を抱き上げる。母さんはカーテンの陰や、廊下の曲がり角の暗がりに隠れていたのだ。何度か繰り返し遊んで、かくれん坊遊びはおしまいになる。

母さんも私もこの遊びが大好きだった。それを眺めているお婆ちゃんも父さんもコロコロ笑いながら楽しんでくれていた。

七才の夏「華」という妹分が来るまで、ドキドキするけど楽しいこの遊びは続いていたのだ。

そう、あのヤンチャな「華」が来る迄は。

（以下 次号）

木槿（むくげ）の花

浄國寺のお庫裡玄関に至る道の両側に木槿（むくげ）の木が五本ほど植えられていて、暑い夏から秋にかけ、淡紅色や白色の美しい花を次々とつけ楽しむことができる。

この花は、朝開き夜になると萎んで落花する。朝には落ちた花を拾い集めるのが仕事。簡単な事だが、これが毎朝の事となると嫌になることも。とかく人間は我がままだ。

ちなみに、むくげはインド・中国が原産。古くは胃腸カタルなどに煎じて飲んだらしい。お隣の大韓民国の国花でもある。明朝も花拾いの仕事が待っている。（隆昌）